
想像の、繰り糸。

chandelier

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

想像の、繰り糸。

【コード】

N8620M

【作者名】

chandelier

【あらすじ】

VP2のラスボスの倒し方。

…想像の、繰り糸。…

「レナスが？」

「拉致られた!？」

戸惑いの声を上げるエインフェエリアの前で、
フレイは顔を曇らせている。

重々しく開かれた口が呟いた名前は、

「レザードに……」

フレイとは反対に、

「ああ……」

と納得し、しかも安堵のため息をもらすエインフェエリア達。
あいつならやりかねない。

でもだいたいじょーぶ、体力少ないし
そんな心境だ。

「この際、一回あいつのやりたいようにさせるのも
いいんじゃないかねの？」

と元も子もない事を言うのはアリユーズ。

もちろんフレイは

「なっ…レナスがレザードに汚されたら、

“ヴァルキリー” プロファイルはどうなるのよ!」
と声を荒げる。

シルメリアのエインフェリアの反応は

「別に……」

個々の能力が優秀なだけに、神々全体に対する忠誠心が薄いのもエインフェリア特有なのかもしれない。

「レザードに汚された”プロファイルでいいんじゃないか？」
アリューゼという男はこんな状況でもくだらない思考回路を止めようとはしない。

「18禁のおいがぶんぶんするんですが…」
一人律儀に突っ込みを入れるのは、気の優しいヘタレ半分妖精ことルーファス。

神に対するあまりの無礼にフレイの顔が青ざめるのも無視して、

「売れるな…」
と不審な事を言うアリューゼ。

「な!?!」
ちゃんと聞きとったルーファスは何となく先が読めて心底びつくりした。

「戦乙女を拉致・監禁、そして剩え換金!」
お〜す〜

「これは売れるぞ、間違いない」
アリューゼの目はOTHになっている。
ちなみにエインフェリアは全員ひいてしまった。

「馬鹿は放っておいて、レナス救出に向かいますよ」
フレイは無視をきめこむことにしたのか、
早速戦略を練りエインフェリアの配置を指示している。
「じゃあルーファス、そして…アリューゼは

私と一緒に来なさい」

ちなみにこれは純粹に「戦力」を見極めた
フレイらしい判断だ。

「おう」

「報酬は貰えるんだろうな？」

ルーファスとアリュューゼが参戦に合意した。

「場所は？」

他のエインフェリアがフレイに聞いた。

「うまく説明できないけど……」

フレイが言葉を濁すと、

「まった！」とルーファスが制した。

「何よ？」

横目で見据えるフレイにビビりながらも、

「そのシチュエーションには飽きたぞ。どうせ

『実家を移送転移』だろ？」

と肩をすくめるルーファス。

「違うわよ」

「なんだよ（シユン）」

気を取り直してフレイが説明を始める。

「ヴァルハラ宮殿に立て籠もっているの」

忌々しげに眉をひそめる。

元・我らが第一級神、オーディンの住まう宮殿だからだ。

「話は早いじゃねえか」

一時期アリーのエインフェリアとして住み込んだことがあるから

か、
アリユーゼが自信満々に言った。

「オーデイン様の宮殿よ？甘く見ないでほしいわね」
半分わずらわしそうに、半分得意げに言ったフレイの
言い方に違和感があったのか、

「どういう？」
とルーファスが聞いた。

「『水鏡』があつた部屋もそうだけど、重要な場所には
結界が張られていて中の様子を判断しにくいの」

デイパン城の地下の天井にフレイの声が反射する。
目の前には、レザードが利用したという時間制御装置が
今もそのままの形で残されていて、
歪んだ魔力の残滓でうぶ毛が逆立つ……
そんな事を思い出して、ハツとするような沈黙をフレイが破った。

「察したようね。
あいつのやることよ……絶対にぬかりはないわ」

もう一度、忌々しげに時間制御装置を見るフレイ。
その眼は今もわずかに時空を歪める装置を通して、
レザードを睨みつけているのは明らかだった。

「入った瞬間、畏にかかつて全員異空間にすっ飛ばされるかもな」
とアリユーゼが縁起でもないことを言う。

「だから、まあ……言いくいだけ」
さらに悪い事に、否定もしないフレイの顔には
エインフェリアを労うような営業スマイルが浮かんでいた。

「何？」

誰も聞けないので、仕方なくルーファスが聞いた。

「誰かに使い捨てになってもらおうかと思って（にっこり）」

二級神！！！！

エインフェリア全員心の中で突っ込みを入れた。

「なっ、おまえがなればいいだろ！」

ルーファスは勇敢にも反抗した。

だがフレイは瞳だけ動かしてルーファスを見るだけで、

「相手は賢者の石の知識の持ち主よ。私ほどの力がないと対抗できないわ」とあしらった。

「そうか…体力の問題じゃないんだな」

とアリユーゼが真顔で言った。

フレイはこくりと肯いた。

「次こそは、絶対に殺し……」

ぞぞぞ。フレイの明らかな殺意に身をすくめるエインフェリア。

全てをなぎ払う破壊神フレイに

ここまでの感情を抱かせるとは、とレザードという理解不能な男に畏敬の念すら覚えてしまう。

処変わって、ヴァルハラ宮殿。

「おや？皆さんに動きがあった様ですよ」

低い声で歌うように言ってせせら笑う男。

「貴様…よくもこんな事を」

神々しい程の美しさを持つこの女性は、あきらかに女神だ。

この状況も踏まえると、

一人ベッドの上で膝を抱える女神はレナス、

そしてこの男がレザード……。

「まあ、そう怒らないでください」

レナスの嫌悪すらもレザードには嬉しくてたまらない様だ。

熱くくすぶる瞳からは想像できないほど、

柔らかな手つきでレナスの頬を撫でる。

「貴女が頼んだことでしょうか？」

片方の口角をちよつと上げて、何となく得意気だ。

「それは……」

レナスは顔を赤らめてレザードから目をそらした。

レザードもレナスから手を放して外の様子を窺っていた

装置の前に立った。

一見水面が光を反射しているかのような装置にレザードの魔力が流れると、フレイ達が映り込んだ。

「様子を見守りましょう。」

貴女がするべきなのはそれだけです」

口元を薄く歪めて、くつくと笑った。

「着いたわよ」

精霊の森を抜けてビフレストを渡ったフレイ一向。
何故そんな面倒な事をしたかと言うと、レザードがアスガルド全域に
結界をはっていて、フレイでもレポートできなくなっていたから
だ。

宮殿を睨みあげるフレイ。

「あいつはどこら辺に居るんだ？」
ルーファスがフレイに聞いた。

「だいぶ奥に潜んでいて…もう、わかりにくいことこの上ないわ」
結界の件も含めて、フレイはレザードに対する無力感に苛立ってい
る。

負のオーラから逃げるように、

「わ、わかった…搜索しよう」
全体で二手に分かれ、レザード討伐が始まった。

それから数十分。

「ここの敵、手強すぎないか!？」
息を切らしながら矢を放つルーファス。

「オーデイン様を守る盾のようなものだもの……
そんじょそこらの魔物とは程度が違うわ」
そう言いながらもフレイは軽々と魔物を一蹴した。

「得意になるなー!!」
「五月蠅いわね、貴方も四宝シルヴァンボウの持ち主なら
もっとしっかり……む?」

フレイは何か集中するように動きを止めた。

「何だ？」

アリュージェも魔物を殲滅して剣をおさめた。

「レザードと…レナスの気配が少し強まったわ」

眉間にしわを寄せるフレイ。

「どうしたんだよ」

ルーフアスはフレイと、フレイの見ていた方向を交互に見る。

「レナスの波動が感じ取りにくい。レナス自身が

外部と何かに遮断されている…？」

ルーフアスは思い出した。

「結晶化!？」

レザードお得意の魔法だ。

そういえば、ユグドラシルの頂上も、見事にカチンコチンになっていた。

「あいつのやりそうなことだけど、流石のレナスもそこまで遅れをとらないと思うのだけど……」

「一刻をあらそう問題には変わりないだろ？どの部屋だ？」

アリュージェの質問に答えるかのように、

「ここが怪しいぞ!!!」

と分かれていたエインフェリア一向が上に階からフレイに向かって叫んだ。

「向かうわよ」

アリュージェとルーフアスは頷く。

合流したエインフェリアの魔術師は、

「この部屋だけ施錠されていたんだ。一応鍵は開けたけど……」

と報告した。

「ご苦労さま。間違いないわ、レザードの邪気がだだもれている…ルーファス」

「へいへい…」

こんこん

「ノックかよ」呆れるアリユージェ。

「どうぞ」

「返事がよっ！」

レザードの返事に身を固くするフレイー向。相手の声は明らかに面白がっている。

「レザード…出てこい！」

ルーファスも冷や汗を掻きながら投降を促したが、

「お入りになられたらどうです？」

と逆に喧嘩を売られてしまった。

「ほら、使い捨て」フレイがルーファスの肩に手を置く。ちなみに「使い捨て」はジャンケンで決まった。

「くっそー……」

膝が笑っているルーファスを見て、

「大丈夫よ、どんなことをされても絶対に助けるから！」と勇気づけるフレイ。

「だとしても皆呪ってやるー！おらあ！レザード……！」

勢いよく扉を開けるルーファス。

勢いで一歩、部屋に踏み込んでしまった。

「ツツ……！！！！！！！！！！」

……

「何もない？」フレイは一応確認した。

「何もない、な……」

ルーファスは青ざめながら部屋を見渡す。

文字通り、何もなかった。

「つか、誰もいないな」

アリユーゼに続いて全員部屋に入る。

「何処にいるんだ……？」

得体のしれない恐怖のせいか、気後れしているエインフェリア達。

「もう一つ、奥の部屋ね」

フレイは奥の扉を睨みつけた。

「ここも？」

「使い捨て」

ルーファスは自棄になって

「くそ……出てこい！」と、

口クな注意も払わずに扉を開いてしまった。

その瞬間、やり過ぎだろうというくらい強力な

魔力がルーファスを始めレザード討伐隊一行を捕え、

さながらドップラー効果のように後退する爆音とともに……

「へ？」

抵抗する自由も与えられないまま、
……ルーファス以外、全員が死亡した。

「何、これ？」

「レザード……」

間違いない。長い前髪が覆う眼鏡の奥で、
瞳孔に光も宿さない筈の眼が暗闇で光った。
眼鏡を眉間に押し当てて喉を鳴らして笑う。

もう一つわかったのは、かなり沢山の兵を倒したからか
明らかにレベルアップしていたということだ。

おそらく今のでレベルMAX（LV99）だろう。
とか何とか、ルーファスは様々な事を考えながら
目の前の狂気を分析していた。

「即死を免れるとは。貴方、何者です？」

レザードに話しかけられてトリップから戻ってきたルーファス。
「何者って……」

お前が何者だよ、という非難を飲み込み
改めてレザードが居た部屋を見回すと、

「あっ、レナス」

奥にはベッドの上で膝を抱えているレナスの姿が。

ちなみに結晶化されてはいない、ついでに言うと拘束道具
すらも見つからない。ルーファスの中でまた違和感が生まれる。

レナスもルーファスの姿を認めたようだ。

「……ルーファスか。フレイは？」と聞いた。

助けにきてもらってありがとうも無えのかよ、とブツブツ言いながら
「死んじまったよ。薬くれないか？」
と冷静な判断は忘れないルーファス。

「ああ、私がやりますので」

そんなルーファスを見てくすくすと笑いながら、
後ろでエヴォークフェザーを施すレザード。

「うっ……くそー、レザードめ」

「絶対に許さないわよ……」

生き返ったアリュージェとフレイは呪詛を呟く。

エインフェリアはレザードの姿を見つけると、部屋の奥に後ずさった。

「本当に、レザード……何のつもりなの？」

怒りで体を奮わせるフレイ。

今にも決め技を放ってきそうな彼女を見て、

「私を責めないでくださいね、皆さん」

と両手を前に出すレザード。

心なしか、レナスを庇うかのように一歩前に出ている。

「私から、頼んだ事なんだ」

レナスは溜息をついてベッドから降り、レザードの隣に並んだ。

「レナス、から？」

「拉致を、たのんだ!？」

驚きの声をあげるルーファスとフレイ。

「そういうフレイを……むぐ」

「黙れって」

アリュージェはルーファスに抑え込まれた。

「いや、これは『破滅を求めるもの』に対抗するための準備みたいなものなんだ」

申し訳なさそうにフレイ達を見渡すレナス。

「レザード討伐かよ!!」

と叫ぶアリュージェに、

「私ではありませんよ」と訂正するセラゲレザード。

「ああ、奴は文字通り即死効果のある攻撃をしかけてくるらしい(レザード談)。それに対抗できる戦士が居るのか、調べたかったんだ。」

レナスは内緒で戦士たちを試すようなことをして決まりが悪いのか、もう一度レザードの後ろに下がった。

レザードもレナスを庇うように片手をレナスにまわした。

「……それ、誰のアイデアなの?」

フレイはレザードを睨みつけた。もうわかっている、勿論……

「私ですよ」

レザードは悪びれもなく微笑んだ。

「変態かよ!」と突っ込みを入れ、

「絶対、他に良いやり方があった筈だ……」
がつくり肩を落とすルーファス。

そう言いながらも、レザードと旅をしたことがある人間ならなんとなく理解できていた。

レザードは、自分が立てた計画を最良だと思わせることにかけては、多分天賦の才能を持っていた。

誰でも彼が決めたことなら間違いないと「安心」してしまう。

彼の人間性への信頼というより、

彼の知識と目的遂行に対する執念への信頼。

だが残念ながら彼に従うと言うことは、

必ず彼のエゴイズムの下に利用されるということになる。

今回が、そのいい例だった。

レザードがレナスとイチャコラできるといっのは相当の利益だろう。

そういえば、旅の進路の決定権も実はレザードが握っていたな、

とルーファスはぼんやり考えていた。

それもやっぱり、レザードがレナスとイチャコラするための……

レザードは自分の案を正当化するためにまだ言い訳をしていた。

「ですが私の術なら100%の効果がありますし、

範囲も広いですから確実でしょう?」

誰に言い訳をする筈なのかも関係ないのか、

視線は常にレナスに注がれている。

「そういう事を言ってるんじゃないくて、わざわざレナスを誘拐するような真似をするなんて……」

とフレイは今更な事を言っている。

「ああ、それは私のモチベーションの問題です。意外に面倒な技な
のですよ?」

つまり、レザードは無償で自分の力を貸す、
などということはしないのだ。

「その代わり、かなり楽しませていただきました」

本当に楽しそうに言うレザードを見ていて

フレイ一行は初めて彼に対して本気で怒りを覚えた。

「見てたんだ、俺たちのこと!!」

「ヤな奴、ヤな奴、ヤな奴!!!」

ブーイングは無視して、

「結果は?」レナスはレザードに聞いた。

「ルーファス、ですね」

レザードはまたくすつと笑う。

「俺!?!」

今日何度目かの嫌な予感がルーファスの背中を走った。

「じゃあ、本番ではルーファス、お前がオトリになれ」

レナスはルーファスを指差して言った。

嫌な予感はまだもや的中した様だ。

「結局そうなるのか!? 生き残っても、痛いんだぞこれ!」

体をさするルーファスには構わず、

「よろしく」

女神は営業スマイルが得意だった。

「呪ってやるーーーー!!!」

ヴァルハラにルーファスの呪詛がこだまする。

e n d .

ここからはおまけです。

「ルーファスが身につけている『methの刻印』が即死効果を相殺しているのですが、気付いていないようですね。面白いのでこのまま見守りましょうか。」

あ、これは私の独り言です、お気になさらず
レザードは一人、移送方陣でヴァルハラから退場した。

本番

「貴様、私をさしおいて100時間も（セラゲで）レナスと楽しんでいたというのか!？」
ヒステリック気味にキーキー怒鳴っているのは「破滅を求める者」。

「貴方も100時間（晶石）レナスの周りをうるちよろ
していたじゃないですか」
飄々と敵の攻撃を避けるレザード。

「変態に優劣が……」
ポカンとするルーファス、あまりのくだらなさに溜息をつくレナス。

「なっ…黙れ、貴様を殺してレナスとの世界を再構築してやる！」

くらえー！ーっ！」

方陣を展開する創造神。

「む…捕まりましたか」

レザードは例の魔力に捕えられてしまった。

周りには意思を持った古代文字が……

「レザード!？」

「我が名は……!!！」

爆音に飲み込まれるルーファスの悲鳴と

破滅を求める者の技名。

ある程度の余韻の後、

魔力で歪んだ空間が本来の姿を取り戻しつつある。

「ッ…やはり痛い事には変わりないですね」

ポンポンと埃を払うレザード。

何事もなかったかのように自身を回復している。

「へ？生きてる?」

ルーファスと破滅を求める者の疑問の聲がハモった。

「生きてますよ?」

それがどうしたと言わんばかりな態度のレザード。

「なんで?なんで?」

混乱するルーファスの前で、レザードは手首に付けていたチャームを引っ張り出した。

「なんでって、…コレ?」

methの刻印。

「あ、お揃い……」

ルーファスも手首につけていたチャームを見た。

ちなみに、「実家」のエリア2で

Emethというエセ不死者が落とす部位アイテムだ。

「気持ち悪い言い方しないでいただけますか？
とりあえずトドメ」

破滅を求める者にあっけない最期が訪れた。

「ぐあー！次は私も混ぜてください！」

「レザード×2！？冗談は

顔だけにしてくれ！」

断末魔を足蹴にされてシユンとする破滅をry。

「俺じゃなくてもよかつたんじゃん……」

10回くらい名前を聞かされたルーファスの呟きは
歪みきつた世界樹に飲み込まれていった。

f i n .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8620m/>

想像の、繰り糸。

2010年10月28日03時51分発行